「知識伝授型」から「協働型」への転換

英語での授業を効果的に行うための大学教員向け研修

留学生の受け入れやグローバルに活躍できる学生の育成――グローバル化の波を乗り切るために、政府や大学がさまざまな教育改革の政策を打ち出す中、大学教職員に求められる力も大きく変化している。英語で効果的に授業を行うための大学教員向け研修を導入した福岡県の私大、福岡大学の取り組みを取材した。

2日にわたって行われた福岡大学での国内研修

海外研修が行われたネブラスカ大学

[福岡大学の取り組み]

大学に求められるグローバル化する社会に対応できる人材の育成

経済のグローバル化が叫ばれるようになって久しい。国境を越えた、人やモノ、アイデアや技術の動きは勢いを増すばかりだ。それに対応できる人材の育成が教育機関にも求められるようになり、政府もさまざまな政策を打ち出している。海外からの留学者数を増やす「留学生30万人計画※1」や日本人の留学生を倍増させる計画、大学などの高等教育機関のグローバル化を推進させる「スーパーグローバル大学事業※2」などだ。

そうした中、アジアの玄関口である福岡に位置する福岡大学では、独自のグローバル人材育成プログラムを展開させている。2013年に「福岡大学グローバル人材育成推進事業」を開始。その一環として、グローバル・アクティブ・プログラム（GAP）を新設した。全学部が対象で、語学力だけでなく、グローバル時代を生き抜くのに必要な総合的な人間力の養成を目的としている。昨年には「福岡大学ビジョン2014－2023」を策定。柱の一つとして、「アジア諸国との関係を中心にして行うグローバル人材育成」が掲げられた。

英語での授業を増やしグローバルな環境を大学内に整える

同大学が重要視しているのが、英語での授業の提供だ。福岡大学国際センターの山田祐二事務部長は、次のように話す。

「今後、より多くの留学生を世界各国から受け入れたいと考えています。そのためには、やはり英語での授業が必要となってきます。英語を

Keyword

FD研修とは？

FDとは、Faculty Development（ファカルティ・デベロップメント）の略。「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称」（文部科学省）。大学設置基準の改正（2008年）によって、全ての大学にFDが義務付けられた。facultyは、「教職員」の意味。

山田祐二事務部長

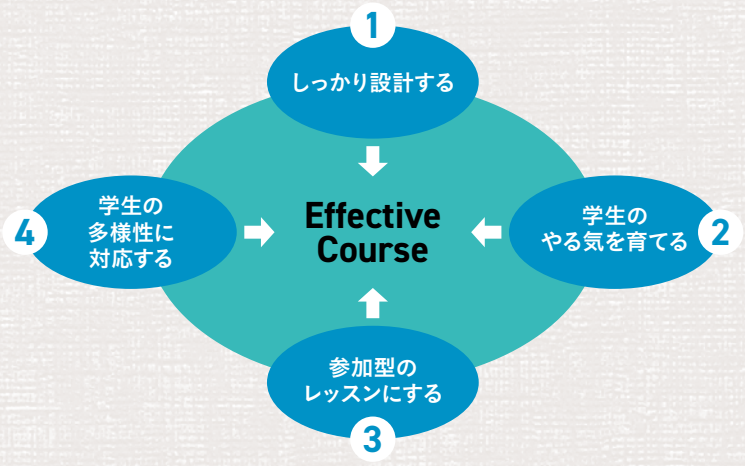
使って授業を提供することで、アジア各国、さらにはオセアニアや欧米からの留学生を受け入れることができ、その結果、海外に留学しなくても大学内で、グローバルな交流ができる環境が整う。それが、福岡大学の大きな目標の一つなのです」。

英語での授業を導入する利点は、そればかりではない。英語で書かれた論文や研究結果・資料をそのまま利用しやすくなるので、最新の研究結果や世界のアカデミズムの潮流を即、授業に反映できる。つまり、大学の国際的な競争力を高められるのだ。

福岡大学では、GAPの授業のうち、65パーセントを英語で行っている。これを、23年までに100パーセントに近づけていくというのが、現在の目標だ。GAP以外の授業でも、医学や工学など、最先端の研究や技術をキャッチしておく必要のある学科などで、英語での授業数を増やしていく構えだ。

英語にスムーズに移行するための4つのコツ

（アルク教育社 FD研修の基本コンセプトより）



© ALC Education

グローバル人材育成の担い手である大学教員のための研修

当然ながら、大学教員にもこうしたグローバルな人材の育成に対応した授業を行う能力が求められてくる。福岡大学の国際センター長である大津敦史教授は、知識偏重型の授業から協働を促す授業への転換が必要だと語る。

「これからの学生は、世の中で何が問題なのかを、自分の感覚をフルに使って、見分け、聞き分け、嗅ぎ分ける能力を身に付けることが必要だと思います。そうやって見つけ出した問題には、さまざまな解答の可能性がある。その中でどうやって、多様な文化的背景を持つ人たちと協働しながら答えを見つけていくか、という学習姿勢や思考回路が必要になってくるでしょう。そして授業では、個々の学習者が自分なりに考えて持ち寄ったアイデアについて、ディスカッションをしながら、ベストな解決策に近づいていく。教える側には、そういった授業のファシリテーター（進行役）となることが、現代では求められているのだと思います」。

福岡大学では、そうした取り組みの一環として大学教員向け研修（FD研修）を導入。アルク教育社が提供する国内・海外研修を、昨年のトライアルに続き、今年は本格的に導入することにした。研修に参加した教員は、医学部や工学部、商学部、スポーツ科学部など多彩な顔ぶれだ。

国内研修は、2日間のワークショップで、日本語での授業を英語にスムーズに移行させるためのノウハウや、授業設計、異なる文化的背景を持つ学生への対応の仕方など、英語で効果的な授業をするために必要なことを学ぶ。学生のやる気を育てるコツや、学生を授業に巻き込む方法などは、日本語での授業にも生かせるだろう（国内研修の様子は次ページで紹介）。

海外研修は5日間。アメリカ、ネブラスカ大学のFDを専門とした教員によるワークショップに参加した他、同大学の実際の授業の聴講や、参加者の専門分野の大学教員との意見交換、模擬授業と講師によるフィードバック・個別コーチングなどを行った。使用言語はもちろん全て英語だ。

福岡大学では、こうしたFD研修を取り入れながら、次世代を担うグローバル人材の育成を支える教育環境づくりを全学で推し進めている。

大津敦史教授

国内研修の様子を
次ページで紹介！

※1 2008年、13大学が「グローバル30」の拠点として採択された。 ※2 2014年に37大学が採択された。

福岡大学 国内FD研修 拝見！

研修は、吉中昌國講師と参加者双方がやりとりするワークショップ形式で行われた。各テーマについて、吉中講師が課題や質問を出し、参加者が3分ほど考えてから、各自アイデアを発表。最後に吉中講師が解説するスタイル。やりとりは基本的に英語だが、理解を深めたい場合には適宜日本語も使われた。吉中講師のユーモアを交えた語り口調で、リラックスしたムードの中で進められた。

《1日目》

1 Introduction：自己紹介

いくつかのトピックを使って参加者同士で自己紹介

全員がほぼ初対面で、出だしは少し緊張した雰囲気。まずは場の緊張をほぐすために欧米でよく利用されるicebreakerと呼ばれる会話の紹介から始まった。吉中講師が「好きなスポーツ」や「無人島に何を持っていくか」などの「お互いを知るためのトピック」を挙げ、参加者が1つ選んで1分半〜2分半ほど話す。このicebreakerの役目は、お互いの認識を「顔と名前」というだけのものから、「人格を持った1人の人間」に変えること。授業の初回にicebreakerを取り入れることで、不安を抱える学生に安心感を与えられる。

2 Design：しっかり設計する

次は、授業の設計について。この部分が一番大事なポイントとなるため、ランチを挟んで4時間ほどしっかり取り組んだ。日本語での授業の密度と質を落とさずに英語に移行するためには、授業の内容や学生が達成するゴールを明確に提示することが重要となる。特にシラバスについては、留学生の多様性に合わせ、授業運営の妨げとなるトラブルを防ぐためにも、成績の付け方や細かなクラスルール（教室内ではガムはかまないなど）まで盛り込む必要がある。そして、わかりやすい英語にするために、ノンネイティブ・スピーカーとして心掛ける注意点★などが話し合われた。参加者からは、実際の授業運営の経験に基づくさまざまな質問が投げられ、活発に意見が交わされた。

POINT!
- □ 話すスピードに気を付ける（ゆっくりめに話す）
- □ 平易な単語や構文を用いる etc.

授業設計のコツは、目的の明確化から

吉中昌國　Masakuni Yoshinaka
アルク教育社専属
グローバル人材開発コンサルタント

カリフォルニア大学バークレー校で社会学修士号取得。アルク教育社で外国人講師のマネジャーを長年務め、企業でのグローバル人材開発コンサルタントとして活躍している。アメリカの大学についての豊富な知識と体験を基に、大学でのFD研修や学生向けのグローバルマインドセット研修なども担当。インタラクティブで丁寧な指導に定評がある。

参加者	福岡大学教員4名
講師	吉中昌國
教材	ワークショップ用 アルクオリジナル教材
取材日	2015年8月20日／21日 両日とも10〜17時（1時間休憩含む）

《2日目》

3 Motivation：学生のやる気を育てる

2日目は、参加者による5分ほどの模擬授業でスタート。他の参加者は授業を聞きながら、良い点と改善点を挙げていく。吉中講師からは、誤解を生む可能性が高い英語の間違いについての解説も加えられた★。普段、他の教員の授業を見る機会はほとんどないため、教員同士の良い刺激にもなるようだ。

その後は、学生のやる気を育てるコツについて。「なぜその学問を選んだのか」をテーマに参加者が話し合う。学生に、学問の楽しさや奥深さについて語り、自分の情熱を示すことで、学生のやる気を引き出すのが目的だ。このように、単に英語で授業するための語学的なスキルの解説だけでなく、日本語で行う授業の改善にも役立つアプローチも多く盛り込まれていた。

POINT!

□ 特に文脈に大きな影響はない、aやtheなどの「マイナーな間違い」は気にせず、誤解を生む可能性が高い「メジャーな間違い」に気を付ける

参加者による模擬授業で改善点を出し合う

4 Participation：参加型の授業にする

次は学生を授業に巻き込むコツについて。静かな学生に発言させる方法を考える一方で、話し過ぎる学生にはどう対応すべきかが話し合われた。参加者は、「間違えたほうが記憶に残ると伝え、間違ってもいい雰囲気をつくる」「グループ課題を与える」など、実際に授業で行っているコツを披露し合った。さらに、肯定的なフィードバックの仕方や、間違った答えをソフトに訂正する方法なども取り上げられた。吉中講師からは、“I agree with you.”や“Your idea is important.”などの言語表現に加えて、アイコンタクトや笑顔などの言語以外の表現方法を併せると効果的、というアドバイスがあった。

少人数制で参加者のニーズに丁寧に応えていく

5 Diversity：学生の多様性に対応する

最後は、学生の多様性に対応するコツを学んだ。まずは吉中講師が、多様性の意味について問い掛け、それを受け入れるメリットについて語る。その後、留学生対応で起こり得る問題例が取り上げられた。例えば「研究室をみんなで順番に掃除しようと提案すると驚かれた」「実験器具を壊してしまったが、謝らなかった」などだ。そういった問題の文化的背景や解決の糸口を参加者が探る。その上で、多文化対応に効果的なコミュニケーションスタイルとはどのようなものか、吉中講師が解説する。最後に2日間のまとめと質疑応答の時間を経て、豊富な内容の国内研修は締めくくられた。

国内研修 参加者アンケート結果

今回のFD研修の有用性については、全員が「大変役に立つ」と回答。総合評価としても、参加した4人のうち、「大変良い3人、良い1人」と高い評価が得られた。

■株式会社アルク　大学営業チーム

[お問い合わせ]
https://www.alc-education.co.jp/academic/apply/

【主なコメント】

- **教材について：**常に受講者の参加が想定されており、教材自体が効果を上げられるようにできていると思いました。
- **講師について：**何より吉中さんのご経験が豊富で、実体験に基づいていろいろと教えていただいたことがためになりました。
- **内容について：**範囲、質ともに良かったです。欲を言えばさまざまなレベルの大学でのレクチャー例などもあると良いと思いました。

※文中の「株式会社アルク教育社」は、株式会社アルクと2017年2月1日付で合併し、現在は株式会社アルクとなっています。